

米軍と戦った唯一の60期生

航空2次 対空射撃班

川島 順 予科21-7

(越谷市) 航空7-1

私は航空士官学校では二次第7中隊の所属であった。第7中隊は区隊長に恵まれ、しかも3人の区隊長（長谷晋第1区隊長、秋山光民第2区隊長、諸隈良夫第3区隊長）がいずれも首都圏に居住されておられた関係で、昭和49年頃より、区隊長を中心とする交流が復活し、やがて区隊会、中隊会と発展してきた。

中隊会は昭和52年9月に第1回が開催されたが、振武台に集合して修武台まで自衛隊のヘリで輸送してもらい、修武台の集會場で宴会を開くという、離れ業をやったのけた。爾来、「長門会」と命名して平成20年まで13回の中隊会を開催してきた。

しかし、会員の減少と高齢化により、中隊会を開催することが困難になり、今後の中隊会開催を断念することにした。そこで、60有余年に亘る長門会の活動の歴史を残すために思い出集・写真集『長門会回顧』を発行することになった。この『長門会回顧』は本年10月の発行を予定しているので、この秩父109号の発行と相前後して発行されるものと期待されている。私は、『長門会回顧』の企画・編集を担当して約1年間、資料や写真の収集し投稿原稿の整理をしてきたが、航士校の思い出集の中に、米軍の戦闘機を射撃したという数人の原稿を発見し、驚いた。

航士校在校時、飛行場の周辺に配置され

た少年兵よりなる高射機関砲の部隊を見た記憶があるが、同期生が直接戦闘に参加していたことは全く知らなかった。

早速、『長門会回顧』の原稿から、防空班の経験を持つものを抽出してみると7中隊の1区隊は甲斐啓一（弾薬手）、★小峰昭二（射手）、2区隊は山上薫（班長）、★小林勝（射手）、3区隊は宮元和衛（射手）、斎藤長寿（射手）、立山尚武（射手）と7人にも及んだ。いずれも、数人で班を構成し、空襲警報が発令されると、重機関銃を担いで、飛行場周辺の蛸壺に入り、架台に重機をセットし、敵機を待ち構える。敵機が進入してくると班長（通常は区隊長）の「撃て」の命令で発射する。小峰と宮元は当たったと言っているが敵機の被害状況は不明である。

偕行誌花だよりの編集会議でこの話をしたら、河野覚兵衛（予科28-7、航空5-3）が「俺は防空班であった。そのことは偕行に昔発表した」とのこと。幸い私は10年程前に偕行誌の目次の電子ファイル（昭和39年～平成3年）を作成し、そのCD-ROMを持っていたので、検索してみると、昭和53年5月号に「戦闘体験」として、P51とグラマンとの戦闘の様子が紹介されていた。さらに調査を進めると、平成5年8月号に菅井仁斌（予科24-6、航空5-3）が「対空射撃班の思い出-P51との戦闘」と題して、当時の状況を可成り詳しく紹介している。これは60期生史の補遺として掲載されているように、「60期生史」や「航空士官学校」にはこのような戦闘体験については全く触れられていない。しかし、菅井の記事では「対空射撃班は運動場の南に近い第3、第6、第2、第5の4個中隊より各1班ずつ編成されていたと思われる」とあり、第1、第4、第7、第8中隊が抜けている。

戦果は7中隊の者も異口同音に「確かに

当たっているが一向に落ちない」と言っているように、重機程度では歯がたたなかったようである。しかし、菅井の記事では未確認ながら1機撃墜したとある。

埼玉60の世話人会でこの話をすると、宮沢洋夫（予科12-9，航空5-4）が射手として数回攻撃したこと。さらに、田村正夫（予科4-6，航空6-4）も「俺も防空班であったが、撃つと撃ちかえされるので撃つてはいけないと区隊長に言われた」とのこと。

もっと、驚いたことは、1次でも経験者が居たことである。1次の整備中隊は修武台に残留していたので防空班が編成され、牧野勉（予科4-10，航空12-1，航空整備15-1）は射手として敵機と対峙したと言っている。

これらの話を総合してみると、2次の2、3、5、6、7中隊及び1次の航空整備15中隊には防空班が存在したことは確かであるが、航空1、4、8中隊に防空班が存在したかどうか不明である。

また、私の把握した体験者は上記以外に★鎌田司郎（予科1-7，航空6-3）、★片山精一（予科25-8，航空5-3）、田中和志生（予科25-7，航空5-3）、★北原伍一郎（予科7-7，航空5-3）がいる。もしも、上記した人以外に経験者がいれば是非名乗り出てください。そして、その状況をなるべく詳しくお話し下さい。それらの資料が集まり次第、再度、防空班についての原稿を書きたいと思っています。

平成23年1月号 秩父110号

航空士官学校の思い出 航空2次・防空班について①

飯村 欽哉

予科31-10
航空6-1
（東京練馬区



秩父109号に川島順氏の「米軍と戦った唯一の60期生 航空2次対空射撃班」と題して当時の状況を紹介した記事があり、体験者が居れば名乗り出て欲しいとの呼び掛けがありましたので、それに応えて次のように報告致します。

私は航空士官学校では第6中隊第1区隊に所属しておりましたが、その間、いわゆる「防空班」を命ぜられたことがありました。戦後、60期生会、中隊会、区隊会などで防空班のことを話し合ったことは一度もありません。航士中隊会（武蔵会）も幾度か開かれましたが、中隊内に「防空班」の経験者が極く少数のためか、全く話題に上りませんでした。

従って、思い出されることが真実か、錯誤ではないか、検証が出来ないのでやや不安ではありますが、思い出すままに、断片的ではありますが、その時の模様を次に取り纏めてみました。

（1）航士校第6中隊の防空班には4人いたように記憶している。第1区隊の飯村、★広瀬潔（予科27-10）、第3区隊の★鎌田司郎（予科1-7）、第4区隊の田村正夫（予科4-6）である。広瀬は同区隊であるので覚えており、彼は射手であった。飯村は連絡掛かまたは班長のような格好であったように思う。また、鎌田と田村

は川島の記事で防空班であった事を知ったもので、両氏とは蛸壺陣地に配置に付いた時は一緒であった筈であるが、その後の接触が乏しかったので記憶が薄れたのであろう。

(2) 蛸壺陣地は狭かった。敵機に重機を向けるときに射手は身動きが取りにくいのではないかと思い、その時は俺が蛸壺から出て敵機の方向など指示すればよいと思っていた。

(3) 第6中隊の陣地から20~30メートル離れたところに他中隊の陣地があった。

(4) 田村が記事の中で「撃つと撃ち返されるので撃つてはいけないと区隊長に言われた」と述べているのは事実である。ただその前に、区隊長(第一区隊長 大津吉雄氏54期)から「将校の命令がなければ絶対に撃つてはならぬ。」と厳命された。

(5) にもかかわらず、区隊長が陣地配置を検分して去った後、陣地付近に将校が一人も見えなくなったのは不審に思われた。敵機が急に来襲したときに、命令権者が不在では射撃ができず、駆け付けてきても間に合わないからである。

(6) 飯村が防空班に服務中は敵機の来襲がなく、従って第6中隊陣地からの対空射撃は無く、他中隊陣地からの射撃音も聞いていない。

(7) 陣地配置についたのは2回か3回位に過ぎなかったような気がする。

航空2次 防空班について②

玉井 寛

予科2-9

航空7-1

(今治市)



64年前の修武台の5ヶ月は本来修得すべき業務は無視され専ら本土決戦の準備で特異な作業の連続で、80年の一生のうち最も強烈な印象として記憶に残っております。皆さんが書いておられる稲荷山公園の坑道作業、生徒舎解体と三角兵舎構築作業、飛行場の畠化と糞尿の運搬等に明け暮れる毎日でした。

防空班については一瞬の記憶のみで、対空射撃班とか防空班とかの組織があったかどうか何も覚えておらず、撃つときは弾薬手は横に居たでしょうかそれも記憶にありません。P-51の来襲に一度だけ重機関銃の射手を勤めました。長谷区隊長が「距離ゼロ、撃て」と命令を叫ばれたのをはっきり覚えています。宮元君が書いているように撃つ直前敵操縦手の顔がはっきり見えたのは強い印象として残っています。敵の弾道が1メートルあまり左を走りましたが幸い被害はなかったのですが今考えるとぞっとします。

射手を勤めたのは1回だけであって、その後、機銃掃射を受けるようになってからは深さ3メートルもあったかと思わせる大きな防空壕で上空の敵機を見ながら右に左に逃げておりました。

航空2次 防空班について③

永竹 庄平

予科30-9

航空8-3

(所沢市)



菅井仁斌(予科24-6、航空5-3)の記事によれば、対空射撃班は第2、第3、第5、第6の4個中隊により、各1班ずつ編成されていたと思われると書いてあるが、そんなことはなく小生の中隊航空8-3もP-51(ムスタング)と対戦している。空襲警報が発令されると重機(MG)に高射托架をつけ、所定の位置に布陣、やがてP51が轟音と共に現われ陣地めがけて機銃掃射をすると、当方も区隊長の“射て”の命令で応射した。

P-51は小銃弾の2倍もあるかと思われる大口徑の薬莖を近くの林にばらまきそれが木の枝葉に当たって驟雨の如き音を立てて頭上を飛び去って行った。

射手になって重機のボタン(軽機は引き金だが重機はプッシュボタン方式)を押している時は気が張っているから怖くないが、弾薬手となって壕の中で小さくなっている時は、近くに機銃弾の土煙が上がるのを見ると武運長久をひたすら祈った。

航空1次 整備中隊・防空班 徳川校長閣下

牧野 勉

予科4-10

航空12-1 整備

(富士見市)



私は航士校では1次第12中隊第1区隊の所属。予士校時代航空適性検査で操縦に合格した。航空の分科発表の時、私だけが意外にも整備となった。当時の中隊長小島太郎少佐(予士校時代は第3中隊長だった)に対し私が整備になったのは何かの間違いではないかと、しつこく問いただしました。然し操縦にはなれなかった。中隊長曰く「お前は兄弟2人で、兄は55期飛行第1戦隊でネグロス島の空中戦で戦死している。お前もパイロットになったらいずれ死ぬ。そしたら牧野家は途絶えるので整備にした。」とのことであった。偶々整備ではあの有名な荒武禎年大尉(55期)が区隊長であった。荒武区助のことについては、色々話題があるけれど今回は省略。

思い出

第1話 米軍P-51に対空射撃

昭和20年8月上旬だったと思うが、当時P51、グラマンが時々航士校に対して機銃掃射をかけてきた。私は対空射撃班に所属し、航士校本部前の梅林に蝟壺陣地を構築し、その中に高射托架に重機関銃を備え付け、空襲時には射手と弾薬手が配置についた(注:整備中隊の防空班では常に重機を陣地内に据え付けていた模様。7中隊では空襲の度毎に重機を搬送したので搬送手2名と射手、弾薬手の4人がかりであった)。ある日、空襲警報が発令され、私は

急いで陣地に行き射手として対戦した。P-51が急降下して機銃掃射をかけてきた。私は5発に1発の曳光弾を装填した重機で応戦。弾道がはっきり見え弾はたしかに命中しているが、機体をこすって飛んでゆくだけ。敵の銃弾はすぐそばを砂煙をあげて飛び抜けていったが幸い味方には被害は無かった。

60期生の殆どが戦闘体験を持たないが私には以上のような実戦体験がある。

第2話 徳川校長閣下の乗用車に同席

昭和20年7月末に操縦士官候補生が渡満したが、整備、通信中隊は航士校に残留した。ある日曜日に区隊長より徳川好敏校長閣下の官舎でお話を聞くよう指示され、入間川町の官舎にお伺いした。茶菓の接待を受け、閣下の若い頃のエピソードを伺った。それは、「所沢の飛行場で杉山元帥を飛行機にお乗せしたが、体格の大きい元帥のため重くて仲々離陸できず滑走路のはずれでやっと離陸し無事飛行を終わって着陸した」とのお話を聞いて驚いた。

そんなお話を夢中で聞いているうち、私の外出門限の午後5時になった。遅刻すれば処罰倉倉入りある。そこで閣下は電話で学校から乗用車を呼び寄せ、閣下じきじき私を乗せて学校まで送り届けてくれた。私を乗せた乗用車は無事校門を通過し、30分くらい遅刻して帰校した。区隊長に事故報告し当日の経過を説明したところ、納得して頂き、遅刻に対する格別の処罰も無く放免していただいた。他には例のない珍事だったと思う。

航空1次 操縦組・防空班 一敵機現れずー

山田 忠雄

予科7-6

航空12-4 爆撃
(岐阜県山県市)



私は航士校に一次生として、昭和20年1月に分遣され、予科以上に厳しい訓練を経験した。

航士校12中隊(富嶽隊)4区隊、区隊長小野寺宏大尉(56期)、渡満は第1梯団(帝立丸)、再編後は第3梯団(福知山で終戦)。

昭和20年、この年は寒くて雪も多く航士校における雪中行軍など今も忘れない。3月10日の東京大空襲はかなり雪の積もった防空壕から真っ赤になった東京の空を空しく眺めていた。

4月には、千葉県横芝航空隊への2週間の隊付も経験した。

今回、埼玉60発行の秩父を恵贈いただき、航空2次の諸兄が航士校で敵機と戦った様子を読ませていただき、一次の私も1回だけと思うが防空任務についたことあるので、その体験をお知らせしたいと思う。

千葉・横芝航空隊の隊付から帰った4月末の頃であったと思うが、空襲警報が発令され、校内の狭い蛸壺内に配置された重機関銃に3~4人で防空任務に就いたことを記憶している。重機には曳光弾を交えた実弾も装填し、握把を握って構えていた。折しも、所沢が米軍艦載機の攻撃を受けているとの情報が入り、緊張とともに血の騒ぐ思いをしたことを覚えている。その後5分、10分、敵機は航士校上空には現れず、空

襲警報は解除された。

以上が私の唯一の実戦配置の体験記であるが、その後はこのような防空活動の記憶はなく、航空一次生徒として航空戦術学、気象学の学習や航空発動機の実習などに励み、6月末の秩父・小鹿野国民学校への移転、更には7月末の渡満の旅など終戦まであわただしい時を過ごした。

敵機撃墜の証言

石村禮二殿（61期、横浜市）

埼玉の同期の戦友海部元より回送された秩父を読ませてもらっています。「米軍と戦った唯一の60期生」を拝読して振武台での思い出が蘇りました。昭和20年の5月か6月頃の空襲で我々が蛸壺壕の中で無為に空を見上げているだけだったのに、その数日後、54期豊村茂平区助から「航士の対空射撃班が重機でP-51と応戦し1機撃墜したぞ」と知らされたことを思い出しました。当時61期は重機訓練を受けておらず、流石本科生徒は違うなあ、すごいなあと感心し、うらやましく思いました。

前号の109号で防空班の経験者に名乗り出るよう呼びかけましたが、多くの方が名乗り上げてくれた。本号では2次の飯村、玉井、永竹のほか1次の整備中隊の牧野の経験談を紹介したが、全国総会の時、松崎一康（予科24-7、航空6-4）、山田忠雄（予科7-6、航空12-4）が名乗り出てくれた。特に、山田は1次の操縦で、1次にも防空班が存在したことが明らかになった。山田は、早速、手記を送って

くれたので本号に掲載したが、その他の人の原稿は集まり次第逐次、次号以降に掲載する予定。これ以外にも経験者がおられたらぜひ経験談を送ってください。なお、秩父109号を見た61期の石村禮二君から、敵機撃墜について重要な証言を得たので掲載しました。（編集子）

相対峙した米軍戦闘機



ロッキードP51



グラマンF6F



シコルスキー コルセアF4U

航士校60期防空班 続報 航空二次6中隊 ④

松崎 一康
予科24-7
航空6-4
(千葉市)



敵機P51の若い操縦士の顔が見えた。

長坂祥夫第3区隊長殿(55期。当日の週番士官?)の「撃て」の命令を受け、高射機関銃(といったように思うが、実際は、秩父110号の牧野勉が言うように、高射托架に備え付けた重機関銃)のボタンを押す。

だ!だ!だ!という発射音。低空飛行する敵機の前方向ミリイ(密位)か左に、照準を定めて発射した記憶がある。

場所は、航空士官学校本部左前方の壕。

P51からの機銃掃射の砂塵が、右方数メートルの所を通り過ぎた。正直恐ろしかった。

終わって調べたら、わずか3発しか撃っていなかった。なぜ3発?どうして多数発射しなかったのか、よく分からない。未熟のせい、怖かったせい。

私は第6中隊(生徒舎は航士校本部のすぐ後ろで第3中隊と棟続き)の第4区隊で、田村正夫と一緒にいた。しかし、1区隊の飯村欽哉が明記している防空班の存在についての記憶が欠落し、いかなる経緯で陣地に赴いて射撃したか、長坂区隊長殿のほかに誰がいたかも定かではない。

昭和20(1945)年6~8月頃の話。余りにも時がたち過ぎた。復員前に生徒舎前の穴で、当時の記録(日誌・教程・写真

など)をすべて焼却してしまったので、確かめるすべもない。

ただ、戦後何人かにこの体験を話したことは覚えているが、区隊会や中隊会でこれを話題にして確認しなかったことが悔やまれる。

まことに、自信のないお粗末な話だが、これが私の対戦記である。

なお余談だが、★大津吉雄(54期)6-1区隊長殿は、私の予科時代の区助だった。そして井内良治殿は、予科・本科通じて同じ区隊長。そんな関係で、大津区助訪問を兼ね、予科同区隊の★3-2井口正隆・★11-2檜森政一・★14-1内海義夫などが、訪ねて来てくれたことは、60期の中の特異事項かもしれない。

防空班航空二次 3中隊 ⑤

山本 吉彦
予科2-6
航空3-1
(西宮市)



防空班と指名された覚えはないが、区隊で入間川飛行場に行って対空機銃を見学中に空襲警報があり、皆は防空壕に退避したが、偶々私は機銃の銃座に座り込んでいたので対空戦に参加することとなりグラマンと対峙することとなった。グラマンは今考えると滑走路に照準を合わせて私の40~50米先の滑走路を機銃掃射して去っていった。私は応戦するどころか呆然として機銃を撃つこともなく、振り向いて機影を見たときは、グラマンは急上昇してやっと機影を確認できるほど遠くに飛んでいった。一瞬のできごとであった。

防空班航空二次 3中隊⑥

匿名（本人の希望により名前を秘す）以下は**鈴木徹信**（予科2-6，航空3-1）が電話にて本人より聞き取った内容を纏めたもの。

私（匿名の本人）は防空班の一員であった。8月13日、警戒警報があり武器庫に急いで行き重機関銃を搬出、飛行場格納庫の裏側の台座に重機を設置し敵機の侵入を待った。台座は直径4米位、深さは1米位で粘土でしっかり固められてあった。その場所は今でもはっきり覚えている。人数は3名位であった。

やがて現れたのはグラマンだったと思うがロケット砲を発射してきたので我々も応戦して重機を発射した。私は弾込め役だったが銃弾、曳光弾、銃弾を三発一組の順に装填した。敵機は一波、二波と繰り返し攻撃して来たが我々も応戦した。暫くして四区隊の上原区隊長が来られたので「〇〇発撃しました。」と報告したら「そんなに撃ったのか」とビックリされました。

やがて空襲警報も解除になり、その周辺の叢で区隊長と車座になり話をした。話は戦局のことに移り、区隊長は「我が国の情勢は大変好ましくない方向に進んでおり困ったことだ」と、我々が「上層部に意見具申をしてはどうですか」といったら「そんなもん通る筈がないよ」とおっしゃった。

その後、重機関銃を武器庫に返納して帰隊した。

その夜、ひそかに誰かから一誰だったか記憶にないが無条件降伏の話が流されて我々は疑心暗鬼に包まれた。

翌朝（14日）から上原区隊長の姿はなく、翌15日の朝、飛行場の傍らで自主作業中に突如上原区隊長が我々の前に現れ

た。私の記憶では服に血が付いていたように思われた。

注：航空7-3の立山尚武（予科6-7）の手記によれば「8月13日（月）午後5時頃、格納庫の近くの防空壕でグラマンに応戦した」ことが書かれている。3中隊と7中隊は同じ場所でグラマンに対戦したことになる。終戦間際に私（川島順：航空7-1）は南地区の食堂の近くでグラマンが4~5機上空を旋回していて、一機ずつ急降下して来て地上掃射をしているのを目撃している。この日の交戦かも知れない。（編集子）

平成23年7月号 秩父112号

航士校60期防空班 続報 航空二次5中隊 ⑦

宮沢 洋夫
予科12-9
航空5-4
（久喜市）



1. 修武台初期の空襲記録

（1）修武台最初の空襲

硫黄島守備隊玉砕（3/17）が報道された直後の3月23日、東久邇宮稔彦殿下ご臨席の下に陸士60期（航空）の陸軍予科士官学校卒業式が振武台で挙行され、我々は航空士官候補生に任命された。翌24日修武台へ移動したが引率指揮官山本健次郎第5中隊第4区隊長（56期）の第一声は「只今より航空士官学校の教育を行う」であった。

3月27日の航空士官学校入校式は、陸軍航空の開祖とされる徳川好敏（中将）校長の下で挙行され、私は航空第2次第5中

隊（中隊長中谷達雄少佐）に編入された。4月1日には沖縄本島への米軍の上陸が報じられ、4月2日夜にはB29による東京空襲があり、空襲警報で退避した壕の中から敵機の焼夷弾による波状攻撃を望見し、4月4日早朝のB29による東京空襲の際も退避した壕から友軍機の交戦の状況を眺めることが出来た。

4月7日は修武台上で第1回の同期生会が航空神社の社頭で開催された。「我菊水の神鷲たらん」との決意を新たにした。会食のため食堂に参集した正午前、突如空襲警報と共にP51が1機超低空で西方から来襲し、機銃掃射をして飛び去った。一瞬伏せてから立ち上がったところに、他の1機が反対の東方から同様に超低空で機銃照射をして飛び去った。これが修武台上での60期が初めて受けた空襲経験であった。啞然とした一瞬であったが、幸い被害や負傷者はなかった。

この日、振武台ではB29の空襲により、区隊長以下同期生6名を含む12名が戦死されたことが、翌日曜日の外出で振武台を訪問した同期生から報じられた。

（2）空襲と退避

4月12日関東にB29,P51連合の来襲があり、午前軍制の授業中、空襲警報により壕に退避して授業は中断された。

4月13日深夜にB29,P51連合の東京来襲により壕に3時間も退避した。

4月15日深夜にはB29,P51連合の京浜来襲があり、壕に退避した。この日、明治神宮が空襲により被害を受けたことが報じられた。

4月19日には大講堂付近で通信実技実施中空襲警報と共にP51が3機来襲し、交互に飛び交いながら乱射してきた。我々は防空壕に退避した。この対地攻撃に対して飛行場の守備隊が応戦したが飛行場に多少の被害があった模様である。

4月24日午前、講堂に向かい歩行中、通信講堂付近において空襲警報と共に来襲したP51に襲撃され急遽防空壕に退避した。この時、始めて友軍機が敵機に対して激しく攻撃した。

この頃、各中隊に防空班、搬出班、救護班が設置された。

（3）隊付教育中の空襲

5月1日兵長の階級に進み、敵機の来襲もなく日課は順調に進み、隊付準備も行われて、5月15日から立川市在の東部561部隊（立川航空教育隊）に入隊した。内務、庶務、兵器、週番下士官等の勤務、将校団との会食も終えて、5月29日に最後の衛兵勤務に付いた。この日、5月25日にB29による夜間大空襲で宮城が炎上したことが知らされたが、午後3時頃、軍装して衛門衛兵に立っていた頃、襲警報が鳴り、F6Fが来襲した。隊内から機銃掃射の音とこれに対する射撃音が聞こえた瞬間、F6Fが衛門に向かい機銃掃射をし乍ら急降下してきた。同期生の光永惇候補生の「伏せろ」の声で咄嗟に伏せた左腕の20cm先を機銃掃射の弾痕がかすめ、敵機は衛門の上を飛び去っていった。暫く立ち上がれずにいると光永候補生に引き起こされて衛兵所で休憩させられた。代わりに駆け付けた同班の三田村候補生が交代してくれた。

（4）外出時の空襲

隊付教育が終わり帰校して、環境整理も終わった6月3日最初の日曜日に、中隊が休養施設として指定した民家を航空同区隊でしかも予科でも同中隊であった梅津健一郎^⑫と共に訪問した。入間川を眼下に見る高台にあった。「入間の流れ水清し」の校歌の一節の通りの光景であった。通された大部屋の床の間の上には陸軍二等兵、海軍水兵、海軍兵曹の写真が飾られていた。出征中のご家族との説明があった。食事には

土地の産物の野菜等を含めた料理が出され、訪れた他の同期生3名と共に腹一杯味あわせてもらった。小学校の女の子が一人いたが、梅津が色々の絵や押絵や漫画を描いてあげたのが大人気であった。2時間程して辞して夏日のような日差しの中を修武台に向かって茶畑の付近を歩いている時、突然P51に襲われた。超低空で機銃掃射をしてきた。私は道端の草むらに退避したが、他の同期生3名は射撃を受けて茶畑の中に退避した。1回の掃射で飛び去ったが、何処もかしこも戦場かという感じを受け乍ら帰校した。

2. 修武台防空記録

(1) 防空班再編成

隊付教育から帰隊した直後の6月2日から気象、有線通信、航空学等の授業が再開されたが、農耕、校舎解体、坑道構築作業に重点がおかれた。6月6日の大本営最高作戦会議における本土決戦断行の決議に対応してか、高射機関銃訓練・高射機関砲解体・結合教育等が実施された。また、空襲に備えて防空班、搬出班、救護班が改めて確認され、出雲隊(5中隊)防空班に4区隊から、宮澤洋夫(射手)⑫、光永惇(弾薬手)⑬、三田村仁(運搬・監視)⑭、城間荘爾(運搬・設置)⑮、週番で差支えが出た際の補充として柄澤昌一⑯が指名された。身幹順であった。

6月10日の陸軍士官学校開校記念日には早朝からB29の来襲があり、勅語奉戴式は変更されて中隊毎に実施された。同期生会は16:00からとなり、決戦を期して同期菊水の誓いを新たにした。

6月14日、航空一次は秩父に移動し、6月18日、60期航空候補生は伍長に昇進した。坑道構築作業に航空一次隊舎の解体・移築、飛行場北西縁の農耕作業が加わり、以後学課等の授業は殆ど実施されてい

ない。6月23日には小型機が来襲したが襲撃することなく飛び去った。そのため6月24日(日)の防空要員は外出止め待機となった。この日も来襲なく、空振りとなった。

6月26日には沖縄の牛島部隊の総攻撃開始が報じられた。

(2) 第1回防空対戦(7月6日)

7月4日(水)P51が120機関東に来襲したが、修武台は空襲されなかった。7月5日は久し振りで学課が再開されたが、7月6日正午頃P51が来襲し空襲警報が鳴った。防空班は直ちに兵器庫に急行して光永惇と宮澤洋夫が銃脚を、三田村仁が弾薬箱等を、柄澤昌一が銃身を担いで指定されていた防空陣地の蛸壺に急行し重機を組み立てた。弾倉には5発に1発の曳光弾が装填された。陣地は運動場の南側、入校して間もなく農耕で甘藷苗を植えた甘藷畑(この苗を植えた指揮は私がとった)の上部にあり、甘藷の葉で一面は覆われていた。その20米先の運動場西側の緩斜面には雑木・雑草が茂っており、その斜面に雑木・雑草に覆われて97式高練、複葉練習機等が数機退避(A群)されていた。その北側道路の先西側緩斜面にも10機程度が同様に退避(B群)されていた。陣地の蛸壺は運動場の南側の雑木・雑草地側に沿い40米位の間隔をおいてジクザクに学校正門方向東に展開されていた。

しばらくしてP51一編隊が南東藤沢方面から飛行場に向かい数機編隊で侵入急降下してきた。校門東側の機関銃陣地からの射戦に対してP51は飛び交いながらロケット弾を発射してきた。これに対応した機関銃の曳光弾が太陽の光を受けて輝いていた。その直後、P51が2機、当方陣地に向かって200~300米の低空で侵入しロケット弾攻撃を仕掛けてきた。週番士官の「撃て」の命令で隣の陣地の重機は応戦

したが、飛行するP51には当たらず、その後方で光っていた。P51は反転して攻撃してきたが、我が陣地からの射程距離は離れていて機関銃を発射することはできなかった。P51は、退避しておいた我が陣地側の飛行機を攻撃することもなく飛び去っていった。

(3) 第2回防空対戦(7月8日)

7月8日は日曜日で大詔奉戴日であったが、外出せず待機していた。この日はB29編隊に連行してP51が来襲したが、正午頃空襲警報が鳴り、P51が大挙して修武台飛行場を来襲してきた。直ちに前週と同様に蛸壺陣地に急行し応戦の準備を整えると同時に、P51の編隊が南東藤沢の方向から飛行場に急降下侵入して来た。3編隊6機が飛び交う敵機に対して校門東側陣地から一斉に高射機関銃が発射された。空には白の煙硝と淡赤の煙が立ち上がっているのが眺められた。

数分も経たないうちに、P51の編隊は再編して我が陣地に迫り編隊を崩して戦闘態勢をとり、分散して高度50～30米まで降下して我が蛸壺の東上空から交互に2機が来襲してきた。週番士官池田壮八2区隊長の命令で隣の陣地から高射機関銃が発射されP51の周辺で炸裂した。それに釣られるように私も夢中で引き金を引いた。P51のロケット弾は蛸壺陣地周辺の甘諸畑に吸収されるようにばらばらと落ちてきたが、敵機は我が陣地東南上空で反転、再攻撃してきた。そのスピードを追い切れず私の発射した機関銃弾は後追いとなり、曳光弾はP51の後方で光を放ち、命中はしなかった。

戦闘が終わり空襲警報が解除され、撤収作業中にP51が1機白い薄い航跡を引きながら陣地西端を500～600米の高度でゆっくりと北上するのを目撃した。後日、このP51は飯能の天嵐山に墜落し、操縦

者は死亡したと知らされた。

(4) 第3回防空対戦(7月10日)

7月10日は早朝から空襲警報が鳴り、我々は防空陣地で待機していた。この日は9時頃から艦載機の編隊が何回となく隊舎を襲撃してきたが、そのうちF6F艦載機2機が陣地上空に侵入し、高度50米から30米迄急降下襲撃してきた。上空を旋回しながら交互に陣地周辺にロケット弾を発射してきた。週番士官西久保義人3区隊長の「撃て」の号令で一斉に機関銃を発射した。銃弾はF6Fの周辺で炸裂したが、F6Fは旋回、上下動して避けながら、繰り返し甘諸畑北側の飛行機退避場にロケット攻撃をしてきた。急降下してきたF6Fの操縦士や他2名の顔もはっきりと見えた。2回目の攻撃の際にロケット弾が退避飛行機に命中し炎上した。敵機が旋回して飛び去る際に我々と同じ程度の年代の若い射手と見られる乗員は白いマフラーを風に靡かせながら手を振り、声は聞こえなかったが何か叫び乍飛び去って行った。

直ちに退避飛行機の所に駆け付けると飛行機1機が殆ど全焼していたが、幸いにも模造機であった。ほっとして退避してある他の飛行機を見ると殆どが模造機や老朽機であった。当初見た時は模造とは気づかなかった程精巧にできていた。

陣地を引き上げた所、同期生1名がF6Fの攻撃により負傷したことが知らされた。帰隊してから山本健次郎4区隊長に「敵機に陣地に侵入され模造機1機焼失した」と事故報告したが、区隊長は笑って何も言わなかった。

(5) 第4回防空対戦(7月30日)

7月15日、池田二郎第一区隊長の転出に伴い、中隊は三個区隊編成となり、第一区隊は3分されたが防空班には変更はなかった。7月18日、空襲警報が関東地方に発せられ、F6Fの来襲に備えて防空陣地

の配置についたが来襲せず空振りに終わった。

7月28日には航空一次の渡満のための出発が終了したことが知らされた。

7月30日早朝より米機動部隊の来襲があり、空襲警報と共にF6Fの攻撃に備え防空班の任務についた。配置陣地は学校本部の東側、民家との境にある防空壕で飛行場への侵入に対するものであった。殆ど使用された形跡はなく、深さは1米位で浅く、壕と云える状況ではなかった。重機関銃を配置準備して飛行場に侵入するF6Fに対し待機した。F6Fは進路を変え飛行場東側から飛行場上空に度々来襲した。そのため配置陣地からは重機関銃を発射する機会はなかったが、F6Fの攻撃により材料廠に火災が起こり消火隊が消火した。

空襲警報が解除され引き上げようとしたところ、滑走路の東南側から学校本部方向に向かい1機が飛来してきたので、練兵場東の松林周辺に配置されていた他陣地の発射に呼応して我々も機関銃を発射したが、そのまま通過して狭山飛行場方面にゆっくりと低空で飛行していった。その帰路B29の模型を右に見て校門の東南地区に配置された蝸壺陣地には銃脚がそのまま残されていたのを見乍ら引き上げた。夜の通報の際、材料廠が被害にあったことと、海軍機が識別できるように学習しておくことが伝達された。我が防空班が射撃したのは海軍機であったことを初めて認識した。これに対して何らの処分も行われなかった。

(6) 第5回防空対戦(8月13日)

8月1日夜、立川、八王子方面にF6Fの来襲があり、空襲警報と共に午前3時頃迄壕に退避していた。8月3日の校外作業中にも来襲あり、また、8月5日の日曜にも外出中に来襲されたとの報告もあった。8月6日広島に原子爆弾が投下され、「新型爆弾」と解説された。9日には長崎にも

原子爆弾が投下され、日ソ開戦も報じられた。

8月13日には米機動部隊760機が関東に来襲し、終日空襲警報下におかれた。この日の配置は飛行場西北地区の滑走路に沿って甘藷畑の中の陣地で、蝸壺は3個あった。農耕作業に肥桶を2人1組でかついで行って育てた甘藷の葉は畑全面を覆っていた。陣地について直ちに重機関銃を組み立てた。この日二度目の補充参加をした柄澤昌一は防空班に参加できてよかったと述懐していた。F6Fは飛行場滑走路脇の格納庫をロケット弾で攻撃したが、他の機関銃陣地の反撃を受けて直ちに反転して滑走路には侵入してこなかった。空襲警報解除により陣地を引き上げたが担いだ銃身が肩に喰い込み重かった記憶は今でも鮮明に残っている。隊舎に帰ると格納庫攻撃の情報が知らされ、翌日の東金子小学校での三角兵舎組み立作業への準備が行われた。

終戦への動きに「君側の奸を斬れ」との山本健次郎4区隊長の動静等伝えられた。8月15日早朝東金子小学校校庭で、ラジオで終戦の詔勅を聞き急遽帰校し、「詔書必謹」か「徹底抗戦」かの混乱を経て、上原重太郎3中隊4区隊長の割腹自決により、修武台の戦いは終結した。

----- 記事訂正のお知らせ -----

秩父111号の防空班航空二次3中隊⑥の記事中「私は弾込め役だったが銃弾、曳光弾、銃弾を三発一組の順に装填した。」とありましたが、本人の申告により「私は弾込め役だったが銃弾、銃弾、曳光弾、銃弾、銃弾で五発一組の順に装填した。」と訂正いたします。

航士校60期防空班 続報⑧ 航空4中隊（相良君の負傷）

伊藤 定市

予科32-9

航空4-4

（新潟市）



秩父112号で紹介された航空5中隊の宮澤君等が活躍した防空班の話に関連して、7月10日の空襲で敵機の襲撃を受け負傷した相良昭君の状況を紹介します。相良君は予科6-9、航空では4-4で、私と同区隊でした。相良君がP51の銃撃を受けたことは小生の日誌に書いてありましたので、それを基にしその時の状況をお話しいたします。

昭和20年7月10日午前9時頃、空襲警報が発令され、私たち航空4-4の生徒は中隊舎前に集合していましたが、防空壕に入ることなく、上空を通り過て行くP51を見送っていました。

P51の編隊は一度南から北の飛行場方面に飛び去りましたので、いつもの事と甘く考えてのんびりしていました。週番士官であった私達の区隊長も真っ白な操衣袴の上に紅白の週番肩章を着けて掛に腰掛けていました。

突如「敵襲！」とか「空襲！」とか「退避！」という叫び声と共に、ゴォーという爆音がして、兵舎の上にP51の姿が現れたのです。一旦、北上したP51は反転して低空で地上掃射にやってきたのです。週番士官の派手な姿が印象的であったかも知れませんが、咄嗟に皆近くの防空壕に飛び込みました。私も…と思ったらもう一番近

くの防空壕は満員でした。仕方なくそばのヒマラヤシーダの根元に滑り込んだと同時に、頭の左30~40cmのところにシューッと着弾の音がしました。爆発を警戒して暫くじっとしていましたが、シューッという音は間もなく消えたので、そっと左手を伸ばし探ってみましたら、熱く感じたので焼夷実包だと判断し、少し冷めてから掘り出してみたら12.7mmの機銃弾でした。

その時、相良君は私と同様に入るべき防空壕が見つからず、側溝に足を入れ側溝の縁に腰掛けていました。P51の左翼の機銃弾は私の側に落ち、右翼の機銃弾は相良君の足の脛を貫通したのです。

直ちに相良君は医務室に運ばれましたが、既に手術中の患者が暑いで2時間以上待たされたとか。壊疽が進み彼の足は膝上から切断されたのです。

なお、60期生史380頁や秩父112号の宮澤君の記事では、7月10日に来襲した敵機は艦載機グラマンF6Fとなっていますが、私の目撃した敵機はP51だったと記憶しています。F6FとP51が連合して来襲したのかも知れません。

修武台における中隊舎の配置について

秩父112号4頁修武台の60期航空中隊舎の位置について、⑤-②、⑥-③の位置は左右逆であるとの異論が出た。すなわち、北門を上とした時、一番左列に②-⑤、③-⑥と配置されていたとのこと。2列目には、北門に近い方から、①-⑧、④-⑦、⑪-⑫、⑬-⑭と並んでいた（この左右の配置は確認されていない）。1次の⑮-⑯-⑰はこの順番で南地区に配置されていた。そして6月中旬に1次が秩父に疎開した跡に、2次の④-⑦が移動してきた。従って、上記記事の航空4中隊は南地区に移転後P51の襲撃にあった。